

## 献辞

鈴木正信

令和八年（二〇二六）三月末をもって、小島孝夫先生のご定年を迎えられる。そこで『日本常民文化紀要』第四十号は、小島孝夫教授退任記念号として刊行することとした。

小島孝夫先生は、昭和三十年（一九五五）、埼玉県北足立郡伊奈町にお生まれになった。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科をご卒業後、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程に進学され、千葉県立大利根・安房・関宿城博物館に学芸員として勤務された。そして、平成八年（一九九六）に成城大学へ着任され、以来三十年間の長きにわたり本学で教鞭を執られた。ご在職中、学部では「ゼミナール」「文化史概論」「文化史基礎演習」「文化史実習」「博物館実習」「成城学（柳田國男と民俗学）」、大学院では「日本常民文化研究」「日本常民文化特殊研究」などを担当された。学科・専攻だけでなく、博物館学芸員課程の教育を中心となって牽引され、多くの博物館学芸員を育ててこられた。

献辞

また、二〇二〇年から二〇二五年度まで民俗学研究所所長として、柳田國男自筆原稿デジタ

ルアーカイブの公開、東京都西多摩郡彫刻調査に関する協定の締結、ペンシルベニア州立大学とのMOUの締結などに取り組み、研究所の発展に大きな貢献をされた。さらに学外では、文化庁文化審議会専門委員など数多くの要職を務められた。近年、博物館や学芸員を取り巻く環境は厳しいものがあるが、先生は官公庁や自治体との橋渡し役を積極的に担われ、文化財保護法の一部改正や無形文化財登録制度の創設に尽力してこられた。

改めて言うまでもないが、小島先生のご専門は民俗学の中でも、とくに地域自治論（生業論・環境論）である。大学ウェブサイトの教員紹介には、「漁村等で暮らす人びとの更新性資源の伝統的な利用慣行の分析をとおして、動植物等の天然資源を持続的に利用するための資源管理の思想について研究しています」とある。一読しただけでは難解な文章であるが、以前、先生のご論文「広域民俗誌の試み」（田中宣一・小島孝夫編『半島のくらし―広域民俗誌の試み―』慶友社、二〇〇九年）を拝読していた際、

価値観が多様化し、社会構造が錯綜していくことで、自分自身の生活が何によって、どのように支えられているのかということがわかりにくくなってしまっているのである。自由な個人としてふるまっていると思っ込んでいるだけで、実際は間接的に不特定多数の人びとに支えられて生きているというのが現代社会を生きる私たちの姿なのかもしれないのである。

との文章が印象に残った。ここにあるように、我々の「生活が何によって、どのように支えら

れているのか」を、先生は現地での調査や民具の実測によって追究してこられたのではないかと拝察する。先生は大学でお会いするたび、「昨日まで学生と熊本に行ってきたんだよ」、「明日は飛行機で与論島に行くんだよ」と、各地での調査の話を楽しそうに聞かせてくださった。とにかくいつも日本中を飛び回っておられる方であった。そうした「現場」を大切にし、フィールドワークを徹底的に行い、人々の生活と真摯に向き合う学問的姿勢は、きつと多くの後進たちによって受け継がれていくことであろう。

先生、このたびはご定年、おめでとうございます。これまでご指導いただき、本当にありがとうございました。これからも各所へお出かけになると思いますが、どうぞお体にお気をつけて、実り多き日々をお過ごしください。先生のますますのご多幸をお祈り申し上げます。